



● インタビュー

湖と生きる

生命の根源、そして祈り 至純の青磁を求め続けて

陶芸家

神農

巖さん

聞き手・三宅 貴江
写真・長井 泰彦

満々と水をたたえる琵琶湖、広がる青空。大津市の陶芸家・神農巖さん(61)は、生々流転するその色と豊かさを形にしたような青磁作品で知られる。筆を使って磁器土を盛り上げて、造形する独自の「堆磁(ついじ)」手法。清らかで優美、気品あふれる作品で数々の大きな賞を受け続け、2016年には滋賀県文化賞に輝いた。日本工芸会理事として、工芸界をけん引する次代のリーダーだ。琵琶湖を望むご自宅で、作品にこめる思いと創作の源という琵琶湖への思いを伺った。

しんのう いわお

- 1957年 京都府綾部市生まれ
- 1980年 近畿大学卒業
- 1980年～ 3年間、京都市立工業試験場や京都府立陶工職業訓練校で学ぶ。その後、京都清水焼窯元にて修業
- 1987年 大津市に窯をつくり独立
- 1988年 日本伝統工芸近畿支部展(現・近畿展)初入選、1994年 日本伝統工芸展 初入選、以来、それぞれで入選を重ねる。2009年 日本伝統工芸展で朝日新聞社賞。2011年 日本伝統工芸展で日本工芸会会長賞。2012年 紫綬褒章、バラミタ陶芸大賞展大賞
- 滋賀県無形文化財保持者、日本工芸会理事



—陶芸を志したきっかけはなんだったのですか？

幼いころから絵を描いたり、ものを作ったりするのが好きでした。美大に行きたかったのですが、商売をしていた昭和2年生まれの方が許さず、経営学を学ぶことになったのです。悶々としていたら、友人に大学の陶芸クラブに誘われた。土に触ったのは初めて。手の動きとともに形になっていく。衝撃でした。窯出しの朝、窯に行くのと、チンチンチンと琴をひくような貫入の

音がする。清楚な、清らかな音。どんどん魅かれていきました。萩、備前、多治見：クラブで各地の窯元・産地も訪ねた。作家の先生、職人さんとお話すると、波長があう。ゆつたりとした心や人間性に魅かれて、こういう仕事がしたいと思った。

決め手となったのは1978年、京都国立博物館で開かれた安宅コレクションの東洋陶磁展です。宋の時代の汝官窯の青磁、高麗青磁、李朝白磁。求めていたのはこれだ！と思いました。色も形もおおらかな造形。中国の宋の青磁を焼きたい。青磁・白磁を天職にしようと思いました。20歳のときです。それから、今度はひとりで各地の窯元を訪ね歩きました。

卒業後は、京都市立工業試験場で釉薬の研究を1年、京都府立陶工職業訓練校でろくろ成形を1年学び、さらに工業試験場の専攻科で青磁の研究を1年しました。4ヶ所四方のピースにさまざまな調合で、青磁だけを何万ピースも焼いて色合いを身につけました。このアカデミックな3年のあと、清水焼の大手製陶所で実地修業を5年しました。清水焼は多品種少量生産が特徴で、いろいろな技術を幅広く身につけることができるからです。最初から30歳で独立すると伝え、密度の高い5年を過ごしました。

自分の仕事をすませたあと、絵付けやろくの仕事を後ろで見させていただいて、覚えしました。ろくろ師は1個いくらの賃仕事。話しかけて手を止めることはできません。当時のろくろ師は、「陰影が出るからろくろが引きやすい」と裸電球で仕事をしていた。土をあげたり下げたり、こてを入れたり、お茶の作法と同じで、まったく無駄のない動き。今、30年たつて、腰の入れ方など、あのシルエットと同じことをしている自分に気づきます。

—そして30歳で独立。滋賀を拠点に選ばれたのはなぜですか。

作品づくりと人との出会いや刺激、その二つが両立する場として、京都から30分以内の土地を探しました。

空の青、湖の緑。滋賀県のこの空間には、私が焼きたいと思っている青磁の色合いがありました。特に山と湖が迫っている湖西の和邇、蓬萊、志賀のあたりで、湖がちょうどよく見える高さの土地を探して、今窯を築いている土地に出会いました。

そのころは、宋の青磁を追い求めていた。でも、求めれば求めるほど遠のいていく。試験場で何万ピースも調合を繰り返していたときも、「できた！」と思って、安

宅コレクションが入っている大阪の東洋陶磁美術館へ行き、ガラスケース越しに比べて、「がっくり」。その繰り返しでした。何が違うのか。一番違うのは精神性です。皇帝に捧げるために焼き、うまくできないと命をとられる。命を賭しての精神性。そして物理的に原料も違う。研究して組成もなるべくあわせても、違う。時間とか風化とか、微妙な窯炊きの状況とか。生意気にも昔の人がやっているからできんことはないと思っていたが、くつがえっていった。

自分は現代の青磁、自分の青磁をつくらう。自分の一番の青磁を、自分の造形にあわせて、神農の焼き物をつくらう。そう決めました。

—自分の造形とは？

ものは作家の思いがないと生まれません。ものに形を与えるのは、作家の思いなのです。それには環境が大きく作用します。フィードが大切になる。

自宅から見える満々と水をたたえた琵琶湖。毎日見て、どこかで私に焼き付いている。その中で発想している。琵琶湖は世界で3番目に古い古代湖です。まさにここから生命が生まれた、生命の根源なのだと感じます。私はずっと「生命の根源」をテーマにしてきま

した。私の思いが一番伝わる作品になるからです。作品は分身です。自分が出る。作り手が「至純」であるとき、環境と同化しているので、見る人も作品の中にその環境を感じ取ってくる。至純であればあるほど、ものは訴えてくる。自分を律して、精神性を高く持ちたいと願っています。

思いの大切さを確信したのは、2011年の東日本大震災、そして母の死に際して、です。



東日本大震災は衝撃でした。理不尽な死。我々には何もできない。祈るしかない。この思いを形にしたい。大鉢にその思いを堆磁手法で盛り上げた(作品写真①)。それが大きな賞をいただいた。わきあがる思いを純粹に形にすると伝わる、と確信しました。

母の死は7年前。そのとき、私はろくろを回して壺を作っていた。訃報に接して、壺の形は女性の子宮の形なのだと思った。大事なものを入れる一番大事な形なのだ、と。その壺に堆磁手法で「動脈と静脈」を合わせ、その細い壺が次第に膨らんでいき、やがて開いて鉢になり、さらに大皿になるまでを、10点のシリーズ作品「膨胎」にした。「静脈と動脈」を表わす堆磁の装飾は、壺を横にして眺めると白波の水のイメージとなる。命を育む女性の神秘性、青磁の神秘的な色合い、琵琶湖の神秘性、全部を一貫したテーマで表現した作品(作品写真②)。これも大きな賞をいただきました。自分の青磁で自分の造形を願ってきたものが、なんとか形になったと感じた。わきあがる思いを純粹に形にすることが大切と実感しています。

とはいえ思いを形にするのは、やさしいことではありません。新作「はすの香炉」は構想から3年かけて完成しました。作品づくりはイメージ先行、技術以上のことをイメージ



① 第58回日本伝統工芸展 日本工芸会会長賞「渦」
 ② パラミタ陶芸大賞展大賞「膨胎Ⅰ」
 ③ 「祈り」

作品写真はいずれも神農氏提供

する。完成までに花びらが折れたり、落ちたり、四苦八苦がありました。何気なく使う「表現」という言葉ですが、ふたつの「あらわす」が入っています。ひとつは、「思いを表わす」。もうひとつが「技術を現す」。表現するには、思いと技術、ふたつが同じ高いレベルにあることが必要です。それには時間がかかります。「工芸は時間の積み重ねの芸術」。高みを目指すには挫折は常にある。ネクストワン。挑戦と挫折の連続です。

——「堆磁」について教えてください。

泥のようにした磁器土を筆で繰り返し塗り重ねる、私の独自の装飾手法です。直線、曲線、さまざまな線が自由にできる。装飾だけだと陰影が出て造形にもなります。着想は製陶所の修業中でした。私は鋳込み成形といっ

て、とっくりなどの型に泥状にした磁器の土を入れて焼く、単純作業が担当でした。その空き時間に「絵付け中に欠けた茶碗」の修正役として、欠けた生地に泥を筆で塗っていました。ひと筆ずつ。乾いたなと思うと、また塗る。何度か繰り返すと盛り上がって本来の形になる。「やり続けたらどこまで盛り上がるのだろう」「装飾技術にならないかな」「使えるな」と思っていました。独自手法ですので、「堆磁(ついで)」という言葉も私が名付けました。

——今取り組んでいるテーマは何ですか？

「祈り」です。

滋賀県は、湖北の観音さまをはじめ、祈りの地域。湖はきよめの水であり、湖のまわりをぐるっと祈りがある。30歳のころは何気なくひきつけられてここに住みましたが、年を

重ねることに、その奥深さを感じます。

私は、ずっと「生命の根源」を探ってものづくりをしてきました。災害、そして親友や身内など大切な人の死、つらい別れを経験して、自分の中に「命の根源」としての「祈り」が位置づけられたように感じます。

祈りは人のDNAに組み込まれているのでしよう。祈りの形は美しい。自分の心に祈ることもあるけれど、対象物が要る。なぜ観音さまとか菩薩とかが脈々とまつられ存在するのか、やっとなかたつように感じています。対象物とやりとりしないと祈る側の魂も鎮まらない。

住んでいるこの地域の祈りと、その祈りの中で自分の祈りを感じる不思議さ。祈りを、いろんな発想で、いろんな形で表現していきたいと願っています。